

ベビー・スイミングについて

—第3報 文献紹介ならびに第3回アンケート調査報告—

研究第2部 青柳幸子・宮崎 叶

澤田啓司

共同研究者 高橋悦二郎(副所長)

曾根秀子

(総合母子保健センター保健指導部)

I はじめに

わが国で出版されているベブイスイミング(以下B. S. と略)に関する図書をみると、その意味づけにいろいろな系統があることがわかる。主に楽しみのため、育児法の一つ、溺れない訓練、幼児水泳の前段階、水泳以外の効果を期待するものなどである。B. S. とひと口に言っても、これらの意味づけに従って指導内容は異なってくると思われる。

われわれは小児保健の立場からわが国のB. S. をどうとらえるかを検討すべく、調査研究を進めているのであるが、各スイミング・クラブ(以下S. C. と略)が様々な系統のB. S. を行っているとすれば、ひとまとめにしてわが国のB. S. を論ずることはできない。2~3のS. C. を視察した際も練習風景にそれぞれ特徴がみられた。

本報告は、わが国で出版され、S. C. のコーチに読まれているB. S. に関する文献を紹介し、「目的・意味づけ」の違いを中心に分析した。さらにその内容が各S. C. でどの程度参考にされているかアンケート調査することにより、指導方針に関する現状を知ろうとした。

以下、IIでは文献紹介(具体的な指導法の載っている図書に限り、パンフレット、講習会資料は除いた)、III~VIでは項目別の比較、VIIでは第3回アンケート調査について報告する。

II 文献紹介 (発行年順。記載内容は次の通り)

通し番号、①書名(原題名)②著者、訳者、編者名
③発行所 ④発行年 ⑤著者紹介

No. 1 ①「水泳日本・世界一への道」全収録・カーライルコーチの助言 ②フォーブス・カーライル、アーシュラ・カーライル、波多野勲、他。スイミングライフ編集部編。③とびうおサーブ出版部 ④1975. 8.

1. ⑤オーストラリアの水泳コーチ夫妻。4つの水泳学校のオーナー。乳幼児水泳は主にアーシュラが担当しているが、フォーブスも理論的研究をしている。波多野氏についてはNo. 6で紹介。

No. 2 ①「0歳からの水泳」子供の健康と安全と楽しみのために(Teaching an Infant to Swim, 1967)

②バージニア・ハント・ニューマン著。東京教育大学水泳研究会、坂田勇夫、鈴木祐子、小倉ますみ、訳

③泰流社 ④1975. 8. 15. ⑤カリフォルニア大学で体育学専攻。1948年よりプライベートな水泳コーチとなる。教え子が2歳で初心者検定証を受け、アメリカ赤十字社最年少記録とする。

No. 3 ①「赤ちゃん水泳」溺れない技術の訓練(Water Safty for Infants-The Drownproofing Method, 1975)

②ダイナー・ヴァン・ダイク著、江橋慎四郎、宮下充正、林夕美子、訳 ③ベースボール・マガジン社 ④1976. 7. 10. ⑥オーストラリアの水泳コーチ。

No. 4 ①「赤ちゃんと泳ごう」ユニークな育児法:ベブイスイミング(Your Baby Can Swim, 1974)

②ボニー・ブルデン著、喜多元子訳。③朝文化放送開発センター出版部 ④1976. 8. 25. ⑤マサチューセッツ州に自ら創設した「体育健康協会」を中心にして体育技術の指導にたずさわり、障害児など特別なケースの運動コンサルタントとして活躍。幼児体操の重要性を述べた著書「誕生から六歳までの健康管理」あり。

No. 5 ①「ベブイスイミング」健康と頭のよくなるための ②斎藤典子 ③鷹書房 ④1976. 10. 1. ⑥選手生

活のあと1970年米国ボストンYWCAでB. S.を知る。その後2回の渡米を経てから、1971年4月、名古屋YMCAでB. S. をスタート。

- No. 6 ①「ベビー・スイミング教室」スポーツVコース
 ②波多野勲ⁱ⁾、小野三嗣ⁱⁱ⁾、品川不二郎ⁱⁱⁱ⁾。
 ③大修館書店 ④1977. 91. ⑤i) 国際水泳プログラム
 研究所長。ii) 東京学芸大学教授。医学博士・運動生
 理学専攻。iii) 東京学芸大学教授。教育心理学専攻。
- No. 7 ①「赤ちゃんの感じ方」知らないでいるママのため
 に ②室岡 一ⁱ⁾、杉山彰著ⁱⁱ⁾。 ③青春出版社
 ④1978. 6. 20. ⑤i) 日本医科大学教授。医学博士。産
 婦人科医。ii) 日本医科大学、産婦人科医師。東京オ
 リンピックの水泳候補選手。3回の渡米でB. S. を
 観察。
- No. 8 ①「0歳からの水泳指導」 ②林夕美子ⁱ⁾、林
 裕三ⁱⁱ⁾ ③講談社 ④1979. 5. 25. ⑤i) 日本体育施設
 運営株式会社水泳講師。ii) 同社常務取締役。
- No. 9 ①「赤ちゃんスイスイ」とびこめ未来っ子 ②故
 島保子。 ③山手書房 ④1890. 7. 5. ⑤ウォーター
 メイツスイムクラブ主任コーチ。全日本選手権入賞な
 ど、競技歴をもつ。
- No. 10 ①水泳コーチテキスト 第14巻「ベビー・スイ
 ミングと幼児水泳」 ②波多野勲、他著。日本スイミ
 グコーチ学校編。 ③日本スイミングコーチ学校
 ④1982. 5. 15. ⑤前述No. 6 ⑤-i)

III 文献別目的・効果・利点・期待

- No. 1 <2歳以下の児の水泳が良いと思う理由>
 ○身体的な安全感覚を与え、脳の知的発育を促す。
 ○筋発育を促す。
 ○社会的、教育的意義。
 ○安全（オーストラリアの家庭には庭にプールがある
 ことが多いので特に重要である。）
- No. 2 <利点>
 ○安全（2歳までに泳げるようにしておくべき。）
 ○健康（未熟児で2歳以降に水泳を始めて健康になっ
 た例を引用。健康というより治療的意味あい。）
 ○楽しみ
- No. 3 <本の主題>
 ○水の近くにいる時の安全性についての自覚。溺れな
 い訓練（Drown Proofing）という言葉は、この概念
 の一部。
 ○効果>
 ○赤ちゃんのいろいろな動きの能力が発達し、最大限

に開発される。

○身体障害児と特殊な欠陥のある子供によい。

No. 4 <目的>

○水に浮いていられるようにすることであって、与え
 られた状況に関して起り得る危険に対する判断力を
 つけさせることではない。

<利点>

- 母親が赤ちゃんの意志を通じあう方法を学ぶこと
 によって、人々の心を「読む」ことができるよ
 くなる。（母の感受性強化）
 ○水難防止。15～19歳および3歳未満の水死件数を減
 少させる。

<効果>

- 障害児の機能を発達させ、正常児に近づくチャン
 スを与える。
 ○強く、健康で、しっかりした人間になるばかりか、
 伸び伸びと幸せな人間になる。

No. 5 <目的・意義>

- 育児の1つとして考える。
 ○赤ちゃんが“泳ぐ”ということは特別なことでなく
 人間の成長の一つのプロセスである。

<利点>

- 各種の刺激を与えることによって、思考力や知恵を
 芽生えさせる。
 ○水による事故の予防。

No. 6 <意味>

- だれにでも楽しいものであり、理屈を越えた文句な
 しのすばらしい世界がある。
 ○一度おぼえた泳ぎの技術は、ゼロ歳であろうと一生
 忘れることはない。一生を通じての水へのパスポート
 は早くもらった方がよい。
 ○自然な発育発達をうながす可能性。
 ○離乳期にたんぱく質（身長伸びに影響）を摂取す
 るためには、適当な運動が必要。日本中の赤ちゃん
 が適度なB. S. を楽しめば、日本人は知能がすぐ
 れているだけでなく、背の高いすばらしい民族にな
 るかもしれない。
 ○知覚の中でも視覚が発想法の形成に大きな影響を与
 えるといわれている。世界中の赤ちゃんが水中ロー
 ル（回転）の経験を経るようになると、人類は大き
 な知能と発想上の飛躍をとげ得るのではないかと。

No. 7 <目的・利点>

- 子どもの命を守る
 ○元気で丈夫な発育を促す第一のもの。
 ○大きくなってからも、大病せず、丈夫で元気ハツラ

つ、そして情緒も安定した子供に育つ。誰にも負けない強い身体と意志をもった子どもになるであろう。

No. 8 <目的>

○乳幼児が溺れない技術を身につけ、さらに泳ぐ距離をのばすこと。(水難防止)

<効果>

○水泳指導中全く泣かない赤ちゃんはまずいないが、泣いた時、何らかの方法で応えることが、反応がすなおで早い性格の形成に役立つ。

○健康面で変化(風邪をひかなくなる。アレルギー体質の発疹、ゼンソク気味の発作がなくなる)

○家族のスポーツ活動が拡大された。

○水泳選手に要求される最も大切な要素、すなわち水に対する感覚が修得され、将来選手となるとき必ずよい効果が現われると考える。

No. 9 <効果>

○子育ての一部と考える。一緒に泳ぐことを通して子育ての楽しさと喜び、誇り、そして自信を与えてくれる。

○水遊びや水泳を通して家族がなごやかになり、楽しい生活をおくるきっかけとなれば、なによりの効果である。

<利点>

○スキンシップを満たす。(乳児期には母と子のふれあいが重要である)

○家族でスポーツが楽しめる。

○幼児より水に早く慣れる。

○水泳だけのためとはいきれないが、健康になる。

No. 10 <目的・効果・ねらい> No. 6 と同じ著名のため内容も共通しているが、より指導者向きに書かれている。

○ロール(水平に水に浮いている状態から、横向きに回転する動作)は、視覚の360°拡大、および水、空気の違ったメディアにおける刺激など、今までにない情報を赤ちゃんに提供する。

○すなわち、人類の発想法を發展させる大きな可能性を秘めており、日本人にとって優秀な頭脳に加えて論理的な考え、長時間にわたる大脳活動の可能性を向上させる鍵がある。

IV 開始月齢について

文献No.①著者の実施しているプールでの最低開始月齢

②理由および意見・問題点など

No. 1 <アーシュラ・カーライル>①生後8週②7~8歳から始めた児でも、赤ん坊から始めた児に追いつくことはできるし、今のところ水泳上の優劣があるとは思われない。(ただし文献No.4によれば「フォーブス・カーライルは1984年のオリンピックを目指して赤ちゃんチームの訓練を始めた」とある)

<波多野薫：西ドイツ・ディエム教授のレポートより>①生後45日 ②母が一緒にいるため出産後45日頃の母体と水泳の問題あり

No. 2 ①生後8カ月くらい ②教える条件を同じにしたら先生にとっては、7歳が一番楽である。こどもにとっては個人差があり、プール・湖・海が近くにある場合は早く教える必要がある。

No. 3 ①生後12~14週 ②この時期から始めると大部分が歩行開始前に背浮きができるようになる。

No. 4 ①浴槽で生後2週 ②小さければ小さい程よく覚える。浴槽が小さくなったり、冒険をしたがるようになったらプールへ。

No. 5 ①生後3カ月 ②ヨチヨチ歩きするとき安全であるためには早い方がよいが、一般的に体温調節や諸機能が落着く3カ月頃がよい。しかしいかに早く水に入るかが全ての目的ではない。いつ始めたらいいかは、母の決めることである。

No. 6 ①生後1~2週 ②始めようとする時期は個人的な問題である。

No. 7 ①生後6カ月②試行錯誤の結果、最も効果のあるプログラムを組み、6カ月から始めるのが理想的。

No. 8 ①生後6カ月 ②事故を起こしやすくなる1歳6カ月から3歳までに泳げるようにするには、3~4カ月で水慣れをすませ、大人の働きかけにすばやく反応し、身体の動きを覚える6カ月頃で始め、10カ月頃から活発になった意識と運動感覚を駆使して指導するのが、タイミングがよい。しかし、1歳や2歳で始めても1年間指導すれば泳げるようになる。(背浮きと伏し浮きのくり返し泳ぎ)赤ちゃんに苦勞して教えるのは苦勞から生れるすばらしい楽しみのためである。(「小学生までまで」という意見に対して)

No. 9 ①最低生後3カ月の経験あり ②水泳をやる目的にあわせて練習を始める年齢を選べばよい。

No. 10 ①生後15日 ②水泳をいつ始めるかは、基本的には自由である。そしてどのような場合にもベストのものを提供しなければならない。

V 泳力上の目標

(どれ位の練習をすると、何歳でどうい泳ぎができ

るか、又は第1の目標とする技術。)

No.1. ○生後8カ月で水の中へ入れ息を止め、自分で浮び上がってくることを教える。

○生後18カ月で自分で飛び込みプールのコーナーを泳ぎ切るようになる。

○生後21カ月で自分で自分の生命を救える能力が身につく。

No.2 水の中で十分に安全になるには、1歳未満で始めた場合は6カ月間(1回は30分、週3回)かかる。

1歳以上で始めた場合は3カ月間かかる。すなわち、50~100時間かかる。なお安全とはプールに落ちたり、つき落されたりしたとき、自力で安全になるまでなんとか進む能力と、意志を身につけるということを意味する。

No.3 生後12~14週から始めた場合(1回30分、週2回)、6カ月間で、服を着て30分間浮いていられるようになる。従って生後7カ月半から8カ月で、水に対して安全になる。

No.4 水に浮いていられるようにすること。

No.5 育児の一つと考え、無理をせず赤ちゃんの自主性にあつ。(1回20分、週1回)

No.6 何歳でどんな経過で始めようとしても、その自然なスタートに最もふさわしい具体的な方法を提供したいという意図から、教程どレッスンが標準化してある。(1人泳ぎは、1歳ごろからの教程にある。練習は週1~2回。2歳台までは1回30分)

No.7 生後14~17カ月で、5メートル程度泳いで壁につかまる。(著者の「生命を守る」という目的を達するのはこの段階と判断した。)

No.8 技術獲得は、水を理解する、水に慣れる、呼吸をしながら浮いている、呼吸して水上を進む、の4段階におけることができる。第4段階が指導効果として現われるのは、生後6カ月ではじめると1歳6カ月ごろ、満1歳からはじめると1歳8カ月ごろである。

No.9 赤ちゃん(3歳までをさす)の泳ぎは大きくわけて「犬かき」「背浮き」「回転」の3つである。どの泳ぎがいちばんよいとはいえず、親しみやすく喜ぶ泳ぎ方をみつけて教えていく。

No.10 →No.6と同じ

Ⅵ 文献紹介・まとめ

紹介した文献の概要は、訳本が4冊(オーストラリア No.1, No.3, 米No.2, No.4)。著者は水泳関係者がほとんどで、No.6の共著が生理学、心理学関係の著者である

が、B.S.についてはあまり触れていない。No.7は産婦人科医による。(但し水泳選手の経歴あり)著者のうち7名は女性である。対象としていると思われる読者は、どちらかといえば母親向きが4 (No.2, 5, 7, 9,) どちらかといえば、コーチ向きが5 (No.1, 3, 4, 6, 8, 10,) であった。ただし、純粋にコーチ向きはNo.1とNo.10で、他は母親向きとしても通用すると思われる。

Ⅲ, Ⅳ, Ⅴでは目的、開始月齢、泳力目標の項目に分けて述べたが、これらは互いに緊密な関係がある。目的によって開始年齢も、泳力目標も当然違ってくる。

表1は目的などをまとめたが、強調されている項目は◎印とした。外国では水難事故防止のためが強調されているし、B.S.は外国から入ってきたものであるから「安全・水難防止」が第1の目的としているものが多い。わが国の特徴と言える「育児法の一つとして」はNo.5とNo.9が第1の意味づけとしているが、著者はいずれも女性であり、No.9の著者はわが子を泳がせた経験が働いていると思われる。No.6の特徴は、児が水に浮んだ状態で起こすロール(回転)が発想法の形式に影響を与えるとしていることである。

表1 目的・効果などのまとめ

文献No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
安全・水難防止	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	○	↓	7
楽しみ・家族スポーツ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
障害などの治療	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	4
知能・発想法	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○	3
性格形成	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	3
育児の一つ	○	○	○	○	◎	◎	○	○	◎	◎	3
健康・強く丈夫に	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	3
自然な発育・発達	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
筋発育・運動能力	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2
身長が高くなる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
将来の競泳に効果	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
教育・社会的意義	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1
母の感受性の強化	○	○	○	○	○	◎	○	○	○	○	1

以上は著者の言わんとしているごく一部であり、この他にも表1に示したごとく、様々な意味づけをし、効果を期待している。しかし、第1の目的は指導内容に直接影響が及ぶものと考えられる。Ⅴの泳力上の目標をみると、「水難防止」を目的としている文献では、はっきり自分の生命を守る泳ぎを目指しており、「育児の一つとして」としている文献は、無理をせず、児の自主性を重んじている。

ところがこの「無理をせず」とはどういうことが問

題になる。おそらく関連していると思われる「潜り」について触れている文献を紹介しよう。やや強制的な「泣いていてもタイミングよく何度かもぐらせる」としているのがNo. 4, 7, 9, (ただし, No. 9は水をのむ時は一時やめるとしている)。すなわち, もぐらせ方のうまいコーチ(児が息を吸いこんだ時沈める)がやれば, 泣いていてもぐらせるのも「無理」とはいえないということである。一方No. 3は, 「息を止めた苦しい状況を強いることをしない。耳や鼻が水圧によって悪い影響を受けることを避ける」としている。背浮きを重視しているのでこの論が成り立つようである。

この低酸素にたえる能力について小野¹⁾によれば, 「新生児は酸素欠乏にたえる能力が成人よりはるかに大きく, できるならばこの能力を保存しておいた方がよい。海女のような訓練はできるだけ幼少の時からした方が容易であるのみならず, 限界能力の高まる程度もずっと高いことが知られている」となっている。ただし, できるだけ幼少とはいつかは記されていない。また血液循環のしくみからは「新生児は心臓自身の未熟と血管の組織的発達が不十分であるので, 全身におよぶ血液循環のすべての責任を, 心臓と血管自身だけに押しつけるのは酷である。これを助けるのはミルクングアクションであり, 特に抵抗のない自由な手足の屈伸が, 血液を機械的に押し流す役目をして, 心臓の負担を軽くする。」としている。「無理をしない」という意味は, この様な生理を分っていることが重要である。

表2には開始月齢, 練習量をまとめた。

開始月齢は後述するアンケート調査と関連で述べる

表2

	最低開始月齢(生後…)	1回の練習時間(分)	頻度(回/週)
No. 1	8週	15分	1回
No. 2	8カ月くらい	30	3
No. 3	10週～ (浴槽で) 12～14週(プールで)	5～6 (10週) 10～15 (11週) 20～30 (6カ月)	2
No. 4	2週 (浴槽)	—	—
No. 5	3カ月	20	1
No. 6	1～2週	30	1～2
No. 7	3カ月 (浴槽) 6カ月 (プール)	15～20 (6カ月～) 20 (10カ月～) 40 (17カ月～)	2
No. 8	6カ月	15 (6～7カ月) 20 (12カ月頃) 20～30 (24カ月)	1～2
No. 9	3カ月	20	1～2
No. 10	15日～	1～2	

が, 傾向としては外国の方が水に早く入れている。また浴槽の使い方, 単なる水慣れ(もぐらない, 水着をつけない)のものと, プールとはほぼ同じ教程を行うものがある。前者は, 開始前段階として, 表2に現われないものもあり, 後者はNo. 4が該当する。

1回の練習時間は, 月齢区分のないものと, あるものがある。15分と30分では随分ちがうと思われる。また練習頻度は泳力目標の高いもの程多くなっている。理想は理想として, 目的, 実情に合わせると週1～2回に落ち着くのが普通であろう。

紙面の都合もあり, 今回はカリキュラムについて詳しく分析しなかつたのでⅦで簡単にふれることにする。

Ⅶ 第3回B. S. アンケート調査

1. 調査目的

これまでに紹介した文献の内容が, S. C. でどの程度とり入れられているかをみる。

2. 調査対象および回収率など

対象はB. S. 実施中であることを我々が把握できた全国のS. C. 48カ所。これには第1回調査²⁾の対象外であったS. C. 協会に所属していないS. C. も含まれる。

回答数24, 回収率50%であった。回答のあったS. C. の地域別では, 東京8, 神奈川5, 栃木2, 愛知2, 大阪2, 福島, 茨木, 埼玉, 千葉, 福岡が各1であった。

3. 調査内容

- (1) 受け入れ最低月齢
- (2) 在籍ベビー人数(2歳6カ月未満)
- (3) B. S. コースの開設年次
- (4) B. S. のコーチ人数
- (5) 指導方法を参考にしている図書(No. 1～10の選択)
- (6) 現在のカリキュラムを決定した方法((1)～(4)選択)

4. 調査結果

調査内容(1)～(6)について表3～8に示した。

表3 受け入れ最低月齢

月齢	N	小計
0カ月	1	14
3	8	
4	3	
5	1	
6	7	8
7	1	
12	2	3
18	1	
計	24	24

表4 在籍ベビー数

	N
50人未満	4
50 ～	11
100 ～	5
150 ～	4
計	24
総ベビー数	2075
1カ所平均	86

表5 ベビーコース開設年次 表6 ベビースイミング・コーチ人数

年次		N
33年	1	※
47	1	※
49	2	
50	4	※
51	4	
52	2	
53	3	
54	5	
55	1	
56	1	
計		24

コーチ人数		N
1人	1	
2	3	
3	3	
4	4	
5	4	
6	3	
10	2	
11	1	
15	1	
16	1	
25	1	
計		24

※ 1歳以上を対象の3カ所

表7 指導方法を参考にしている図書

文献	N	(%)
No. 2	6	25.0
No. 3	7	29.2
No. 4	8	20.8
No. 5	9	37.5
No. 6	18	75.0
No. 7	1	4.2
No. 8	12	50.0
No. 9	3	12.5
No. 10	1	4.2
その他※	7	29.2

※ その他のベビースイミングの教科書および心理・医学・育児、保育などの図書 (重複解答あり。%は24に対する。)

表8 カリキュラム決定の方法

(1) 参考図書とはほぼ同じにしている。	
(2) 講習会で受けた指導にそっている。	
(3) 独自のカリキュラムを組んでいる。	
(4) その他。	
	N
(3)	7
(1)+(3)	3
(2)+(3)	3
(1)+(2)+(3)	3
(1)	4
(1)+(2)	3
(2)	1
計	24

＜表3＞受け入れ最低月齢は、低いところが予想以上に多く、意外な結果であった。我々はB. S. 開始の好ましい月齢として、先天異常のスクリーニングの終わる6カ月頃をめやすと考えていた³⁾のであるが、その6カ月より前に受け入れるS. C. が24中14と半分以上であった。そこでこの項目についてのみ、次の3点について再調査した。

- a. 受け入れ最低月齢を決めた根拠
- b. 実際には生後何カ月で始める児が多いか。
- c. その他開始月齢に関する意見

回答は10カ所から得られた。うち3〜4カ月から受け入れのS. C. は7カ所、1歳以降が3カ所であった。a. について。前者の7カ所中、4カ所が「首すわり」を入会の基準としていて、主な理由は扱いやすいということである。2カ所のS. C. では「水に慣れやすい」ことを理由にし、残る1カ所は「やってみて大丈夫だった」という根拠である。以上7カ所中4カ所はより低月齢(生後まもなく)で始めることを理想としている。

1歳から受け入れのS. C. 2カ所は「歩行開始後」とし、1歳半からのS. C. は「会員制スポーツクラブのため、排尿・排便に問題のない年齢」としている。すなわち、開始月齢は各S. C. の経験や事情で決められることが多く、コーチの指導上の理想は別にあるようである。その理想の根拠は文献の影響が強いと思われる。(表2参照)

b. の実際にはどのくらいの月齢で入会が多いがでは、0歳ではやはり6カ月〜12カ月が多く、1歳〜1歳半で入会も同じ位あるということで、これに較べれば3〜4カ月で入会する児は今のところ少ないようである。ただし、年々低月齢児が増えているとの報告が2カ所よりあった。

＜表4＞ 全国調査で現在の総ベビー数2075名を把握できた。回収率50%を考えれば全国のベビー実数はかなりになると思われる。

＜表7＞ 参考図書は、No. 6、No. 8が多くあげられたが、この2冊は月齢ごとの詳しいカリキュラムが確立しているので当然であろう。

＜表8＞ 表に示したごとくカリキュラムの独自性を主張するS. C. が多く、「独自のカリキュラム」のところは7カ所、「図書、講習会を参考にして独自のカリキュラム」が9カ所であった。

「参考図書とはほぼ同じ」としたところは重複回答を含めて13カ所あり、その図書はNo. 6が9カ所、No. 8が2カ所、No. 5が1カ所であった。「講習会の指導にそっている」のは重複回答を含め10カ所、講習先は次の通りで

ある。

- 国際水泳プログラム研究所 (IISP) 3カ所
- 母性小児生活指導センター 2カ所
- オーストラリアで実習 1カ所
- パウマイスター (西ドイツ) 1カ所
- 林夕美子 1カ所
- 不明 2カ所

5. 調査まとめ

以上の結果から各S. C.がどのような指導内容をもつて検討し、次の5つが主な系統であることが分った。

- (1) 文献No.6 (10) にそったもの。
- (2) // No.8 にそったもの。
- (3) // No.5, 9 にそったもの。
- (4) 外国のB. S. 指導者から教授を受けたもの
- (5) いろいろな図書・講習会を参考にして独自の方法を確立したもの、または模索中のもの。

系統(1)~(5)の違いはその目的を何を考えるかによるところが大きいで、IIIを参照されたい。ここでは具体的カリキュラム構成の違いについて比較してみたい。

(1)(2)のNo.6, No.8は生後何カ月で始めても水慣れがうまくいくよう、組まれていて、1回の練習時間で行う内容が細かく指示してある。つまり標準化してある。

これに対し(3)のNo.5 No.9は年齢別の細かい規準はなく、児に合わせ自由に教程を組み合わせるよう指示している。実際指導を行う場合はNo.6, 8, を教科書とした方が、指導はしやすいであろう。No.5, 9は経験豊富なコーチなら可能かつ有効であろう。

(4)はカーライル、エバポレイ (オーストラリア)、パウマイスター (西ドイツ) による。いずれも水難防止が目的なので、わが国で作られたカリキュラムより訓練的意味合いが強いと思われる。今回調査では指導法のどの部分を取り入れられるかは明らかにはならなかった。

(5)についてはわが国の実情を表わしていると思う。すなわち、10年経つとはいえ歴史はまだ浅く、ベテラン指導者が不足していることが考えられ、各S. C.では試行錯誤で進めているのではないだろうか。

B. S.はそれぞれの目的にそって安全な方法で行えば、統一されたカリキュラムは必ずしも必要ないかもしれない。しかし参加希望者がふえるのに対して、指導者養成が追いつかないと思われる現状を考えれば、一つの決定版ともいえる体系ができることが望まれる。

VIII おわりに

文献研究・アンケート調査を行った結果、わが国のB. S.の現状は、小児保健の立場が望むところの確立された理論体系はできておらず、まだ試行錯誤の段階を脱していないS. C.が多いことが明らかになった。特に開始月齢については、小児保健指導上、猶予ならざる問題である。今後は科学的裏づけを追求すべく「B. S.が児にどのような影響を与えるか」について、調査をすすめていく予定である。

〔参考文献〕

- 1) 小野三嗣「親と子の水泳教育」玉川大学出版部1977
- 2) 曾根秀子、他：ベビースイミングについて第1報 日本総合愛育研究所紀要第16集、P.29~39, 1980
- 3) 母子水泳研究会、乳幼児水泳部会：ベビースイミングと幼児の水泳、母子衛生研究会 1982